

渡し続けた地域の脈動！ 『国指定重要文化財 旧揖斐川橋梁』



旧揖斐川橋梁（揖斐川42.6K+90m）平成25年10月撮影

10月10日（木）、揖斐川中流域に架設されている「旧揖斐川橋梁」の橋の上から河川巡視を行いました。この橋梁の渡り口には、案内看板が建てられており、以下のように紹介されていました。

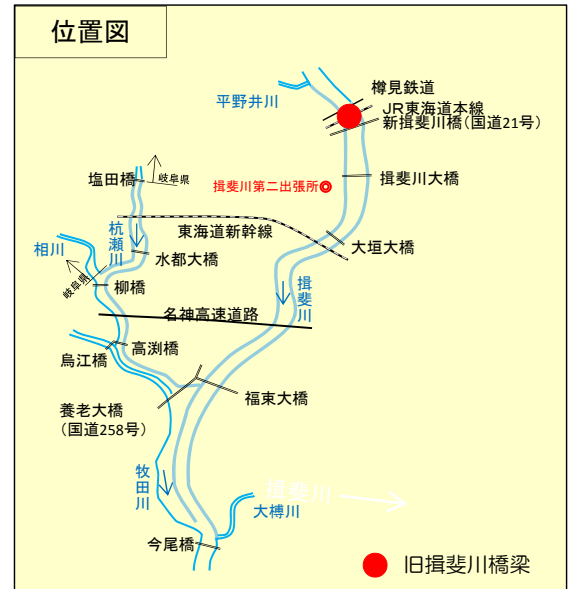
【案内看板より転記】

旧揖斐川橋梁は、橋長325.1m、ピン統合構造をもつ2百フィートの鍊鉄製五連ダブルワーレントラス橋梁です。東海道線の岐阜～大垣間の建設に伴って揖斐川を渡河するために架設され、明治20年に供用開始されました。英国人鉄道技師C・ポーナルが設計し、英国の Patent・シャフト & アクスルトゥリー社で製造されました。

明治41年の複線化に伴い廃止されました後に道路橋に転用され、昭和63年に大垣市へ移管されました。現在でも、ほぼ当時の原型を保っており、地元の生活道路として親しまれています。

日本で最初に完成した幹線鉄道である東海道線において、最も高度な技術を駆使して建設された大規模トラス橋の1つで、かつ唯一原位置に現存する遺構として価値があることから、2008年（平成20年）12月2日、重要文化財の指定を受けました。

大垣市教育委員会



橋梁に打ち付けられている銘板。

PATENT SHAFT & AXLE TREE
CoLd 1885
WEDNESBURY



現在、橋面部はアスファルトの舗装になっていますが、昔々はここに線路が敷かれ、煙をあげながら蒸気機関車が橋を渡っていたそうです。橋脚部はコンクリートで補強されていますが、円形煉瓦井筒（直径12フィート）という煉瓦積みの橋脚で、水面近くには煉瓦の部分を見ることができ、当時の面影を知ることが出来ます。



アスファルト舗装された橋面部
（大垣市新開町）



ピン結合といわれるトラス橋